

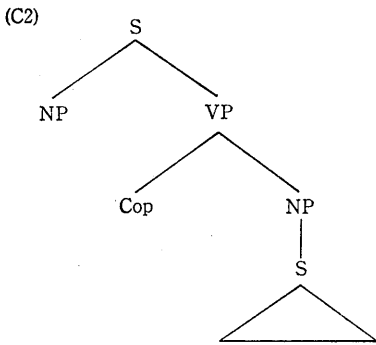
# 英語深層文型の一試案 (Ⅲ)

## —Copula を用いる複文型—

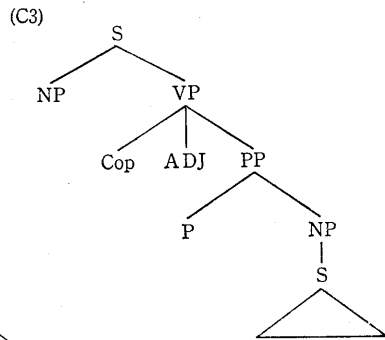
村田 忠 男

### 1. 第三部への序

本稿の第一部、第二部は、梅光女学院大学英米文学会発行『英米文学研究』第10号(1974)及び第11号(1975)に発表した。第一部では、深層文型 (Deep Sentence Patterns) を、単文型 (Simplex Sentence Patterns) に限り提案し、第二部では、主部に補文をとる文型を7種類に下位区分し、複文型 (Complex Sentence Patterns) の最初の型 C1 を扱った。この第三部では、Copula (Be 動詞) の後に補文の生ずる複文型を一括して取り扱うことにするが、次に C2 から C6 までの深層文型と代表例をあげておく<sup>1)</sup>。

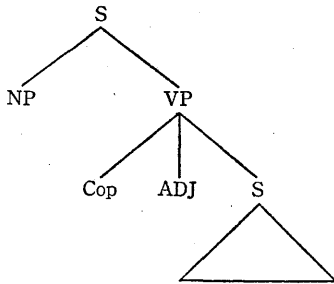


The excuse was that John had left.

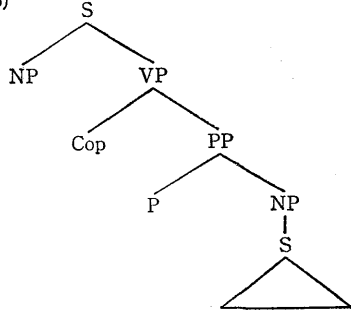


I am afraid of opening doors.

(C4)



(C5)

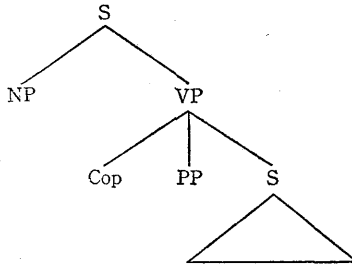


(C4A) I am afraid to open that door.

That would be like torturing himself.

(C4B) Mary is pretty to look at.

(C6)



(C6A) I am at a loss to explain the  
reason.

(C6B) This coffee is like tar to drink.

## 2. 最近の動き

ここ数年、Chomsky らの変形文法は「痕跡理論」を取り入れて、拡大標準理論 (EST) を修正する方向に進んできている。Trace を残すことによって表層構造だけで意味解釈を行うため、EST のように深層及び表層構造の両方で意味解釈をするという無格好さがなくなり、また、名詞句の移動変形規則に関する制約も EST よりすっきりした形で述べられる可能性があるという。こうした修正の結果、従来の深層構造の役割のうち、直接意味解釈部門の入力になるということがなくなったことなどから、Chomsky

(1975, p. 82) は、深層構造という呼び方をやめて、代りに *initial phrase marker* (始発句構造標識) を用いる提案をしている。このことから、深層構造という概念が変形文法の中から不必要になったと考えるのは誤解であり、呼び方はどうであれ、依然として、基底部門によって生成される深層構造は、表層での多様性にもかかわらず、言語の規則性を最大限に表わしている重要な概念であると考えなくてはならない<sup>2)</sup>。もっと具体的に述べれば、PS rules によって定義される形式的条件、つまり深層構造における構成素の文法関係と構成素間の順序関係の規定は痕跡理論を導入しても、不変であるといえる。痕跡理論を採用すると、当然のことながら、例えば Fiengo (1977, pp. 58-60) が議論しているように、文法関係の解釈も全て表層構造で行いうる可能性があるというが、しかし、文法関係の解釈をすることと、規定することとは別問題であり、たとえ痕跡理論の方が秀れていることが、今後証明されたとしても、深層文型の議論には直接影響がないといえる。というのは、深層文型は、第一部で述べたように、終端前記号列 (Preterminal Strings) の枝分かれ図によって分類されており、その段階で決定しうる文法関係と構成素間の順序については、基底部門を大修正しない限りは、不変であるからである<sup>3)</sup>。

### 3. Copula の Be

今回扱う文型は、いずれも Copula (Cop) をとるが、本稿での Cop (be のみ) は、(1) のようなものは含まず、(2) のみである。

- (1) a. He *is* working.
- b. I *was* scolded.
- c. John *is* in the garden. /God *is*.
- (2) a. To see *is* to believe.
- b. She *is* kind.

(1)a の be は be-ing として AUX ないし VP から支配される要素で、(1)b の be は Passive 変形で導入されるし、(1)c の be は存在を表わす true verb と考え、S5 に属していることになる。(2)a の Cop は、厳密に考えれば、

NP の内容によって、主語と Predicative との分類を表わしたり (e. g., He is a poet.), 定義を表わしたり (e. g., Grammar is a science.), 命名したり (e. g., The capital of Japan is Tokyo.) すると言えるが<sup>4)</sup>、主部の NP と Predicative NP との意味的同一性を表わしているという点では共通である。(2)b の Cop は、主部と、主部に関する性質を表わす形容詞とを結びつけるもので、第一部 (p. 141) で述べたように助動詞とは考えないことにする。従って第一部で仮定した文法関係を示す次の定義は、今回もそのままである。

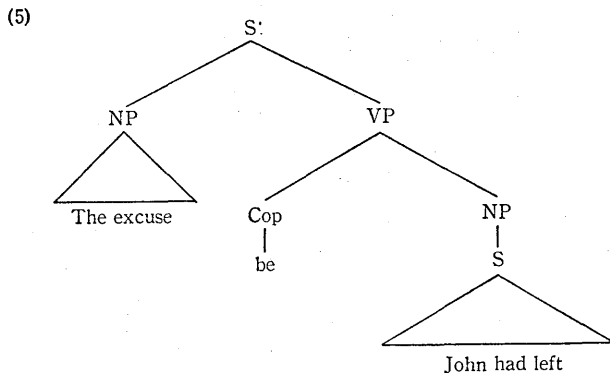
- (3) Predicative—of: [Cop NP, VP], [Cop ADJ, VP],  
[Cop PP, VP]

#### 4. Complex Sentence Pattern 2 (C2)

C2 に含まれる文は次のようなものである。

- (4) a. The excuse was that John had left.  
b. The plan is for John to leave.  
c. My hobby is collecting LP records.

(4)a の深層構造は S1 と同型で、概略次のようであると仮定し、その補文は、(3)に基づいて predicative complement sentence (叙述補文) と呼ぶことにしたい。



これらの例文に類似した (6) のような同格節が形成されることがある。

- (6) a. The excuse that John had left...  
 b. The plan for John to leave...

Chomsky (1970, p. 198) は、(4)a は (7) から同格節を後置して派生することを提案している。

- (7) [<sub>NP</sub> Det N Comp]<sub>NP</sub> be [<sub>Pred</sub> Δ ]<sub>Pred</sub>

その根拠として、(8) のような文が存在しないからという。

- (8) a. \*The excuse [that John had left] was [that Bill should stay].  
 b. \*The plan [for John to leave] is [that Bill should stay].  
 c. \*The question [whether John should leave] is [why Bill stayed].

しかし、(8) に類似した構造を持つ (9) のような例も存在しており、Chomsky の観察は不正確である。

- (9) a. The proof [that the little prince existed] is [that he was charming, that he laughed, and that he was looking for a sheep]. (Saint-Exupéry, "The Little Prince", IV.)  
 b. The reason [why I am dealing with so many pictures tonight] is  $\left\{ \begin{array}{l} \text{because} \\ \text{that} \end{array} \right\}$  I happen to have seen them all just recently.

(大塚高信編「新英文法辞典」, p. 251)

確かに次の (10) の a と b を比較してみた場合には、remain や exist などとは完全自動詞であって、Ross (1967) の Extraposition from NP が適用されたと考えるべきであろう。

- (10) a. The possibility [that he is not going to recover] remains/exists.  
 b. The possibility remains/exists [that he is not going to recover].<sup>5)</sup>

しかしながら (11) のような例は決して存在しないのである。

- (11) a. \*The excuse [that John had left] is.  
 b. \*The plan [for John to leave] is.  
 c. \*My hobby [(of) collecting LP records] is.

ということは、Chomsky の提案では be の場合、必ず後置変形を適用しなくてはならぬということになってしまうが、(9) のような例で主語の補文を後置することは、勿論不可能であり、彼の提案には問題が生ずる。

さらに Inada (1975, pp. 6-7) のあげている次のような例を考えてみたい。

- (12) a. The Arab's hope/ plan/ intention/wish to continue the negotiations...  
 b. The Arab's hope/plan/intention/wish is to continue the negotiations.
- (13) a. The Arab's attempt/refusal/failure/ability to continue the negotiations...  
 b. \*The Arab's attempt/refusal/failure/ability is to continue the negotiations.

彼は Chomsky と同様、(7) のような深層構造から同格節を後置する変形によって、(12)b, (13)b が派生されると考えているが、(13)b の head noun を動詞の形にすると、Rosenbaum のいう VP 補文をとるもので、これらが後置を許さないのは、VP 補文をとる動詞に Pseudo-Cleft 変形が適用できないのと同じ制限があるからだと考えているようだ。しかしながら、(13) と同じ attempt を head とする (14) のような例が存在する。

- (14) a. Attempts [to introduce the principles of Newton to the young] were soon made.  
 b. Attempts were soon made [to introduce the principles of Newton to the young].

Inada の説明だと、(13)b と同様、(14)b も非文になるはずだが実際には正しい文である<sup>6)</sup>。ここで、(12)a と (13)a の、同格節と head NP との意味関係は微妙に異なっていることに注意したい。今、十分に論ずるのは不可能だが、たとえば、Quirk ほか (1973, pp. 620-648) を検討してもわかるように、head NP と同格節及び関係節との関係は、一般に大変複雑である。非常に緊密な関係を持っているものから、そうでないものまで、種々ありるので、今まであげた (6), (9), (12)a, (13)a, (14)a だけ見ても、その多様性は想像できる。しかしながら 3 節で述べたように、Copula の両端にくる二つの NP は、何らかの意味的同一性を要求するという事実のあることを思い出せば、(13)b は、その点から、(12)b と違って意味解釈が適用されない文であるということになり、Inada のように後置変形を適用したた

めに非文になったと考える必要はなくなる。

さらに、次のように二つの NP がどちらも補文をとる例が存在する。

(15) a. [To see her] is [to love her].

b. [To touch a snake] was [to touch something secret in the mind of man]. (Saroyan)

これらの文主語を後置することは (9) と同様、勿論不可能であり、どのみち、Copula の後に補文が基底部門で生成されなくてはならないのであるから、本稿の (5) のような深層構造を仮定するのは少しも、不自然なことではないのである。

以上から、(4) にあげたような文を (7) のような深層構造から派生する考えには問題点もあるので、本稿では、(4), (9), (12)b, (15) のような文は (5) のような深層構造をもつ C2 の例であると考えたい<sup>7)</sup>。

## 5. C3 と C4A

C3 と C4A は、いっしょに扱っていくことにする。第一部で採用した Adverbial-Complement-of は、VP に直接支配された PP との機能を表わしたが、それに加えて、VP から直接支配される S に対しても用いることとし、第一部の (9) を次のように拡張する。

(16) Adverbial-Complement-of: [PP, VP], [S, VP]

本稿の第 1 節で示したような C3, C4, C5 に埋め込まれた S は、Adverbial Complement Sentence (副詞的補文) と呼ぶことにするが、これらは；文頭などに自由に移動できる VP の外に生成された純粋な副詞節 (ADVP) とは、異なるものである。形容詞と副詞的補文との意味関係は多様であるが、これは個々の形容詞及び、C3 の場合は、その後にある前置詞に何が選ばれるかによって決まってくるもので、lexicon に帰すべき問題であるように思われる。

次の例は、a が C3 型、b が C4A 型に属する。

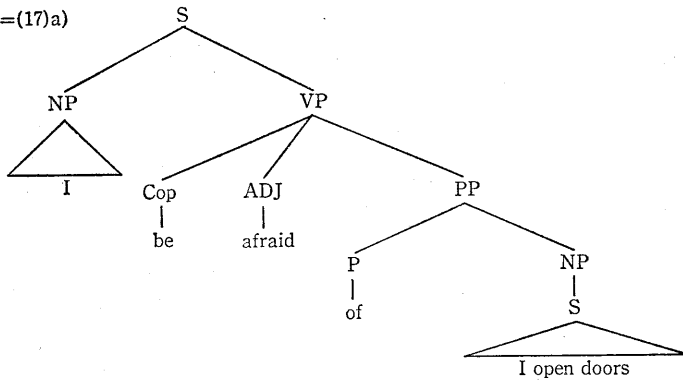
(17) a. I am afraid of opening doors.

b. I am afraid to open that door.

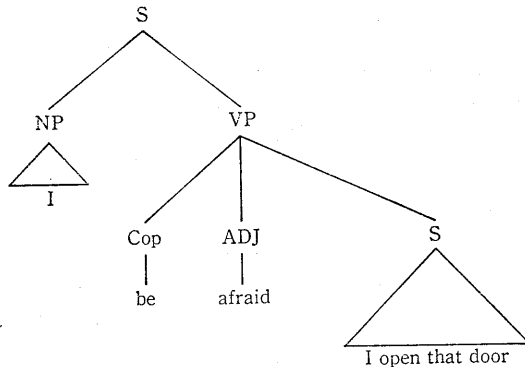
- (18) a. Hellen is interested in attending the lecture.  
 b. I am interested to know the result of the exam.  
 (19) a. We were surprised at finding the house empty.  
 b. I was surprised to find myself underwater.

以上あげたような形容詞は、PP の下に補文をとる C3 と、直接補文をとる C4A のどちらにも用いられるが、それぞれの文型に分類する根拠はこれから述べていくが、まず、次に (17)a と (17)b の簡略化した深層構造をあげておく。

(20) (= (17)a)



(21) (= (17)b)



Ogawa (1971) は、afraid の補文特性を論じて興味深いデータをあげている。次の (22)b が不自然になるのは、動名詞構文だと [+specific] な意味を持つ補文が許されないからだという。

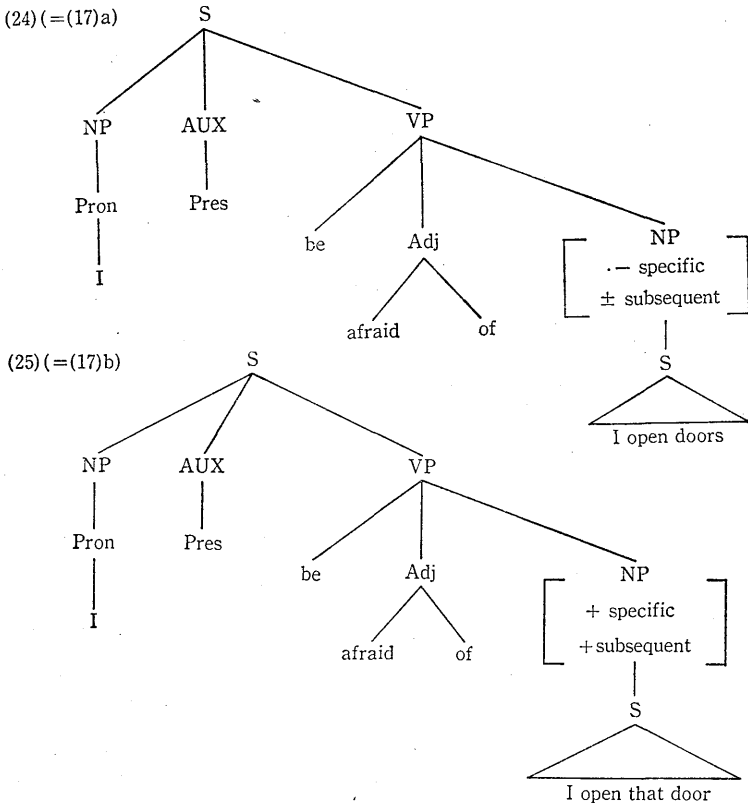


- (22) a. I am afraid of opening doors.  
 b. \*I am afraid of opening that door.

(22)bは、of 以下を to open that door にすれば (17)b と同じ正しい文になる。さらに、次の (23)b が許されないのは、不定詞補文だと [+subsequent] な意味を持つ補文のみ許されるからだという。従って、未来のことを述べた (23)c は正しい文である。

- (23) a. I am so afraid of studying that I didn't do it last night.  
 b. \*I am so afraid to study that I didn't do it last night.  
 c. I am so afraid to study that I won't do it tomorrow.

以上の観察は正しいものと思われるが、彼は (17)a, (17)b に対する深層構造を次のように考えている。



[±specific], [±subsequent] という素性の値によって, (17) の a と b の違いを表わしているわけだが, (25) には問題がある。(25) の補文も (24) と同様, NP に支配されているが, しかし, 次の (26)a, b でわかるように, 名詞の働きをしているとは思えない。

- (26) a. I am afraid of it. (=of opening doors)  
 b. \*I am afraid it. (=to open that door)

また, 動名詞補文は必ず of が出現し, 不定詞補文では現われないのであるから, (25) のように of を最初から導入する必要はなく, (20), (21) のようにした方がよい。補文の特性指定も, 形容詞によって様々であるから, Ogawa のように base rule で導入するよりも, lexicon に記載した方がよいと思われる。

次に, proud も Ogawa は afraid と同じ特徴を示すといい, 次のような例をあげている。

- (27) a. \*I will be proud of working with Professor Jones on this project.  
 b. I will be proud to work with Professor Jones on this project.

(27)a が非文であるのは, 動名詞補文の場合 [-specific] が要求されるのに, on this project で [+specific] になるからだと考えている。しかし, proud は, 私の調査した限りでは, afraid とは異なる点があるようだ。

- (28) She was proud of her son winning first prize.

この例は, 小西 (1974) にあるもので, Frank の “Modern English” (1972) というアメリカで出版された本からの引用である<sup>8)</sup>。この例の補文が [-specific] であるとは考えられないので Ogawa の反例になる。

さらに, (29)a と (29)b のような例は, 私の尋ねたアメリカ人教師のうち二人は, a を一切認めず, もう一人は a がだめであるという反応を示した後, 別の様会にもう一度見せると, 不可能ではないが, b の方が自然であると答えた<sup>9)</sup>。

- (29) a. \*?I am proud of calling him my friend.  
 b. I am proud to call him my friend.

この文は、[+specific] であるとは考えにくいので、Ogawa の分析だと、(29)a は正しい文になるはずなのに、私の調査では、認められないことの方が多く、これも、(28) とは逆の意味で彼の分析では説明できない例になってしまう。一般の辞書には勿論、小西 (1974) でも、(27)a や (29)a が不自然であることについての説明は見られない。恐らく、proud to do は、いつの場合も許されるのに対して、proud of doing には方言差、個人差が著しいということになり、我々日本人としては、proud of は後に(代)名詞が生ずる場合以外は、使用しない方が無難であるということになる。しかし、少なくとも Ogawa の調査した方言においては、もし、その観察が妥当なものであるのなら、動名詞補文をとる文は C3 の例、不定詞補文をとる文は C4A の例になるという対立が存在していることになる。

次に、interested の場合であるが、(18)a であげた例をそのまま不定詞に変えることは許されない<sup>10)</sup>。

- (30) a. Helen is interested in attending the lecture.  
b. \*Helen is interested to attend the lecture.

しかしながら、不定詞の生ずる例は、(18)b の他に、次のようなものも、普通の英和辞典に記載されていることがある。

- (31) a. I should be interested to hear the end of the play.  
(岩崎、小稲編「新英和中辞典」)  
b. I'd be very interested to know. (小西 (1974))

ただし、なぜ (30)b は許されず、(31) が許されるのかを説明したものは見あたらない。私の考えでは、不定詞に hear, know などの [+stative] を持った動詞がくる場合は許されるが、[-stative] な動詞は、(30)b の attend と同様、次の例でも非文になる<sup>11)</sup>。

- (32) a. \*He is interested to meet your friend.  
b. \*I am interested to collect records.

問題は、[-stative] な動詞をとりながら、次のように、多少、stilted ではあるが正しい文が存在するということである。

- (33) a. He was interested to meet your friend.

b. The pupils were interested to listen to the program.

(竹林, 小島編「ユニオン英和辞典」)

c. I was interested to observe how both Hideki and Sumiko directed their discipline to prepare a child for his next experience. (小西 (1974))

これらの文は、一見、私の説明の反例のように見えるが、しかし、(32)と比較すればわかるように、いずれも過去時制になっているということである。「過去のある時に、ある行為や動作がしたかった」ということは、現在の時点から見れば、それは状態 [+stative] の一種と考えられなくもない。もし、このように、不定詞補文をとる interested が [+stative] を要求するのに、動名詞補文の場合は、何の制約もないという観察が妥当なものであれば、動名詞補文をとる interested in は「～に興味をもっている」という意味で、「～するのに興味をもっている、～したい」という微妙に異なった意味を持つ不定詞補文を伴う interested との差と共に、(18)a が C3、(18)b が C4A に属するという本稿の立場を支持することになる。

以上のような interested の特徴は、私の調査した限りでは、proud の場合よりも、もっと方言差が少ないように思われるので、不定詞補文の制約については、我国の辞典類も、記載すべきであると思われる。

次に、(19)a, b であげた surprised の例は、動名詞補文をとる (19)a を、そのまま不定詞に変えても (34)b のように正しい文にはなる。

(34) a. We were surprised at finding the house empty.

b. We were surprised to find the house empty.

この a, b に差を認めて、明示している文献にはまだ出あっていないが、native speakers に詳しく確かめてみると、at を伴う a の方が、行為の生じた瞬間をより強調し、at という前置詞が、明確に行為を指摘するようである。それに対し、不定詞補文は、単に to 以下の原因や理由を表わすに過ぎない。この差は、それぞれ (20)、(21) と同型の深層構造をあてはめることで、説明がつく。つまり C4A 型の不定詞補文は、前置詞消去変形を経て派生されるのではなく、最初から前置詞をとらないのに対し、C3 型の方は、前置詞が深層構造に生じており、それが表層構造においても、C4A

との微妙なニュアンスの差を生んでいると考えることができる。実際、Pseudo-Cleft 文にしてみると、(34) の a と b の差が明確になってくる。

(35) a. [What I was surprised at] was [hearing the news.]

b. \*[What I was surprised at] was to hear the news.]

さらに、次のような例は、不定詞補文のみが生ずるので、C4A 型に属することになる<sup>12)</sup>。

(36) a. He is apt to do the job.

b. He is liable to forget.

さて、今まで、C3 と C4A の議論は、わざと、動名詞補文と不定詞補文の場合のみに考察を限定してきたか、ここで that 補文について述べておきたい。(37) の certain などは、動名詞補文と that 補文が自由変異であり、どちらも C3 に属することになる<sup>13)</sup>。

(37) a. I am certain of Dick's being loyal.

b. I am certain that Dick is loyal.

これらの Pseudo-Cleft 文を作ると、that 補文の場合にも of が生ずる<sup>14)</sup>。

(38) a. [What I am certain of] is [Dick's being loyal.]

b. [What I am certain of] is [that Dick is loyal.]

従って、このような場合には、前置詞消去変形が適用されて、(37)b のような文が派生されると考えてよい<sup>15)</sup>。

逆に、sorry は、surprised などと同様、不定詞補文と that 補文が自由変異であり、この場合、最初から前置詞はなかったものとする。

(39) a. I am sorry to have kept you waiting.

b. I am sorry that I have kept you waiting.

以上、C3 と C4A については、個々の例を一つずつ、注意深く検討してきたつもりであるが、結局は、この節の最初の方で述べたように、どのタイプの補文を選ぶかは、形容詞によって異なり、幾つかの群に分類する可能性は残るものの、今の所 lexicon で記載するしかないように思われる。ただし、従来、かなりの変形文法学者が考えてきたように、(また、一般の英和辞典類の記述もそうであることが多いが) 三つの補文タイプを単純に一つの基底構造から派生するのは問題があることを指摘できたと思う。

## 6. Object Deletion と C4B

次に, C4B の例をあげておく。

- (40) a. Mary is pretty/beautiful/ugly to look at.  
 b. The coffee is hot to drink.  
 c. This room is a pigsty to look at.

これらは, Lasnik & Fiengo (1974) が (Complement) Object Deletion (以下, OD と省略) を受ける文としてとりあげているもので, 深層構造には, 主語と同一の NP が, look at や drink の後にあったと考えられている。このような構造を持つ形容詞は, 話者の主観的判断や評価を表わすが, (40)c のように, 一見, 名詞が生ずることもある<sup>16)</sup>。しかし, こういった用法の名詞は, 全部, 比喩的な意味を持つもので, (40)c の pigsty も「ブタ小屋」そのものを指してはいない。従って, このような特殊用法が可能なのは, lexicon では, もともの意味をもつ名詞とは別に, 形容詞の項に記載されることになる。

Lasnik & Fiengo (1974) は, (40) のような文の不定詞補文は, S ではなく, もともと VP であるという議論を行っている。

- (41) The problem is too difficult for John to solve (it).

(41) の文において, it の OD は随意的であり, 彼らの結論は, it が生ずる場合, for John to solve it は S であり, 一方, it が OD を受けた場合, to solve が S ではなく, 基底において VP であったという。しかし, (41) に限っていえば, it があってもなくても, 文意は全く変化しないという事実を忘れてはいけぬ。OD を随意的にすることで説明可能な二つの表現形式に, 別々の深層構造を仮定する必要はないのではあるまいか<sup>17)</sup>。

実際, Jackendoff (1972, pp. 227-228) の観察によれば, too や enough を含んだ文の不定詞補文は, 母体文と “directly relevant” でさえあれば, (42) のように直接 coreference を示す名詞がなくても, 正しい文ができあがるようである。

- (42) a. This room is too chilly to turn on the air-conditioning.  
 b. The weather is warm enough for us to go swimming.

次の(43)aでは、主文の主語と補文の主語が、coreferenceをもち、(42)と同様、ODには一切関係なく、いずれもC4Aの例である。

- (43) a. This pig is  $\left\{ \begin{array}{l} \text{old enough} \\ \text{too young} \end{array} \right\}$  to climb the fence.  
b. This pig is  $\left\{ \begin{array}{l} \text{fat enough} \\ \text{too fat} \end{array} \right\}$  to eat.

(43)bは、This pigが補文の主語とも、目的語とも解釈できる例で、前者ならC4A、後者ならC4Bに属することになる。

(41)の場合は、このように表現方法の自由なtooやenoughを含む文の一種で、ODが随意的に適用されるC4Bの特殊例であるということになるろう。

さて、第二部の4節で、いわゆるtough類(ここではDouble-for predicate類と呼んだ)が、文主語をとる(44)のような場合をC1D型として分類し、Lasnik & Fiengo (1974) その他の観察をとりいれて、従来のTough Movement変形を受けたとされる(45)は、別の構造を持つもので、C1Dには入れないと結論づけた。

- (44) a. To please John is easy.  
b. It is easy to please John.  
(45) John is easy to please.

(45)のような文は、結局、本稿では、C4Bと同型の例であるということになり、Object Deletion(またはTough Deletion)を一応認めることになろう<sup>18)</sup>。

(46)に使用されているような、従来tough類に入れられてきたbreeze, bitchなどの名詞も、(40)cのpigstyと同様、比喩的用法に限られるので、lexiconでは形容詞の項に入れて、ODを受けるよう記載されることになろう。

- (46) a. This house is a breeze to clean. (Postal (1971, p. 28))  
b. That problem is a bitch to solve.

Lasnik & Fiengo (1974, p. 568)はODを受ける形容詞や名詞のsubcategorizationを次のようにしている。

(47) NP<sub>i</sub> be  $\begin{pmatrix} \text{ADJ} \\ \text{N} \end{pmatrix}$  for NP to<sub>VP</sub>[VX—<sub>i</sub> Y]

このように、単に N と指定してしまうと、pain in the neck/ass のような数語からなるイディオムのような場合、処置しにくくなるのではなからうか。本稿では、pigsty も breeze も一括して、ADJ の下に導入することにする<sup>19)</sup>。

## 7. C5 と C6

C5 と C6A, B は、Coula と共に Predicative PP をとる文型で、それぞれ次のような例を含むものとする。

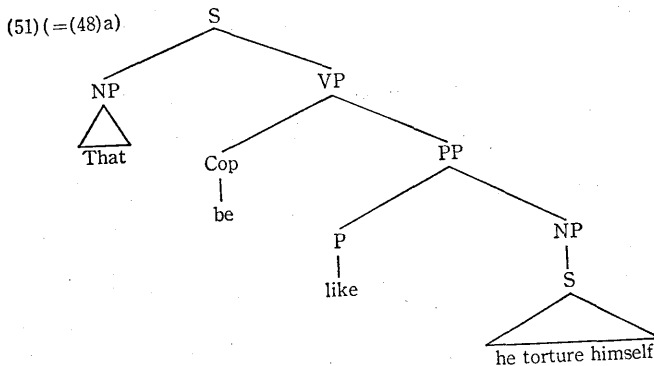
- (48) (=C5) a. That would be like torturning himself.  
 b. I am against changing the law.  
 c. I am for making the rule.

- (49) (=C6A) a. I am at a loss to explain the reason.  
 b. You are at liberty to make use of this room.

(50) (=C6B) This coffee is like tar to drink.

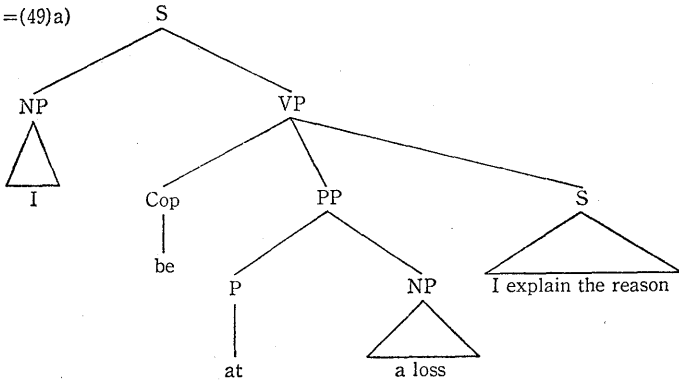
(48)a と (49)a の深層構造は、それぞれ概略、次のようになる。 (AUX はいつものように省略する)

(51) に含まれる補文は、C2 と同様、Predicative Complement Sentence (叙





(52) (= (49)a)



述補文)であるのに対し, (52)の補文は C4と同様, Adverbial Complement Sentence (副詞的補文)であることになる。

まず, C5の(48)に類した文例は, 前置詞が上記以外のものを見つけにくい, 次のような文はどうであろうか。

- (53) a. Are you through asking questions ?  
b. He is worth listening to.

(53)aは, throughの後に withを補った例が存在するので, 普通, 辞典では throughは副詞と考えられてるようだが, 次の例はどうであろうか。

(54) Are you through your homework ?

この文の throughは間違いなく前置詞であるから, この用法に馴染んでいる話者にとっては, (53)aの throughも同様に前置詞であると感じられてくるのではなかろうか<sup>20)</sup>。(53)bの worthは, 辞典では例外なく形容詞と普通考えられているが, 次のような例と比較されたい。

(55) It is worth the trouble.

この文の worthは後に, 冠詞と名詞を従えているのであるから, 前置詞と考える可能性が全くないわけではないだろう<sup>21)</sup>。そうだとすれば, (55)と(53)bが平行な表現形式であることから, (53)bの worthも, 前置詞用法への多少の接近が感じられなくもない。

実は, (48)aのような likeでさえ, 形容詞ないしは, 副詞ととる可能性

が多少はあることを、「アンカー英和辞典」などは示している位である。

このように、C5 の例は、歴史的に見ると恐らく C4 との関連が密接になってくるが、少しずつ前置詞らしさを生じてきているものと思われる。

C6 は Predicative PP の後に副詞的補文をとるが、(49) を C6A, (50) を C6B としたのは、(50) が C4B と同様、Object Deletion を受けるからである。Lasnik & Fiengo (1974, p. 567) は、(50) の like を determiner と呼んでいるが、本稿では、(48)a の like と同様、前置詞であると考えたい。C5 と C6B で用いられる前置詞で、確実なものは、まだ、わずかしか見つけていないが、C5 と C6B の productivity 自体は高いものであるから、敢えて独立した文型を設定したのである。

第四部以降では、自動詞及び他動詞の補文の型を、順次取扱っていくつもりである。

(1977年 8月23日)

#### 注

1) C4, C5, C6 は第一部に示した一覧表にはなかったものである。ICU 大学院に 1974年 1月に提出した修士論文では、本稿の C2, C3 に相当する部分は全体でわずか 3 ページばかりしか述べていず、非常に不完全なものであった。今回の改訂により、第一部であげた PS rules のうち VP の書き換え規則は次のように修正されたことになる。

$$(3) (ii)' \quad VP \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} V (NP) \left\{ \left\{ \begin{array}{l} PP \\ S \end{array} \right\} \right\} \\ \text{Cop} \left\{ \begin{array}{l} NP \\ ADJ \left\{ \left\{ \begin{array}{l} S \\ PP \end{array} \right\} \right\} \\ PP (S) \end{array} \right\} \end{array} \right\}$$

2) Chomsky (1975, pp. 83-84) に、深層構造ないし、始発句構造標識の意義について述べている。深層構造の重要性及びその役割に関する最近の議論として、中村 (1976, 1977), 鈴木 (1977) などがある。

3) ただし第一部、第二部で採用した Subjects-of: [NP, S] というような文法関係の定義を、Chomsky (1965) では一般文法理論で述べてきたが、この方式の修正はありうるかも知れない。本稿では、一応この方式を続けていくことにする。Chomsky

(1970) に提案されている X-bar 理論の研究が進めば、基底部門に修正が生じうるが、八木 (1977) によると、現在までのところ、まだ検証中のようである。

4) 例えば金口 (1968, pp. 67-68) など。

5) Kageyama (1976) は、(10)a の動詞を remain や exist のかわりに、“assertion” を表わさない worry me のような表現にすると Extraposition from NP は適用できなくなるという。

6) Kageyama (1976, p. 46) は、(14)b の were soon made のかわりに “assertion” を持たない were soon abandoned のように表現に変えると非文法的になるという。

7) Hornby (1975) では、本稿の C2 は、Verb Pattern 1 の Table 10, 12 の一部と重なっているが、例えば、次のような文は混同されるべきではない。

(Table 10 の 4) Everything was as we had left it.

(Table 12 の 1) This house is to let.

(Table 12 の 2) The best is yet to come.

Table 10 の 4 と 12 の 1 の be は true verb であると考えられるし、Table 12 の 2 から 6 までの例は VP4F (Table 35) に含まれるべきであると思われる。これらは順序は変わっても、彼の旧版 (1954) でも同様であり、改まてはいない。序いでながら、Table 1 の 4 に Seeing is believing の例が、Cop+動名詞の唯一の例としてあがっているが、しかし、この文の Ing 形は、第二部でも論じたように、名詞的動名詞の可能性が強い。だとすれば、本稿では S1 の例ということになり、動名詞補文をとる (4)c のような文は載っていないことになる。

8) (28) が正しい文であることは、私も二人のアメリカ人教師によって確かめた。

9) インフォーマントとして、Andrea Safir (ニュー・ジャージー出身)、Luda Matiash, Peter Garlid (カルフォルニア出身) の三人 (いずれも大学で教師の経験あり) には、この件に限らず、度々御世話になった。

10) 1975年11月に実施された国立大学協会主催の「国立大共通テスト模擬問題」の I. (28) に、この (30)b ではなく、(30)a を選ばせる問題が出ているが、これは高校生ならずとも難しすぎるのではなからうか。

11) [±stative] に関する議論は、荒木、小野、中野 (1977) の 3章 2節に詳しい。

12) (36) のような例については、安井、秋山、中村 (1976, 21. 8.) 参照。同書 (p. 251) の説明によると、このような形容詞は、傾向、義務、能力などを表わすもので、主文の主語と補文の主語は必ず、同一でなければならず、また補文の動詞は、[+stative] であってはならないという。

この説明に一見、反例であるかのような例が岩崎、小稲編「新英和中辞典」に見つかった。

(i) We are liable to be in New York next week.

補文の動詞は確かに [+stative] なのであるが、しかし、実は、この例文中の liable は likely とほぼ同意味に使用するアメリカの口語用法であると辞典は説明してい

る。(i) の liable の代わりに likely を入れた次の (ii) は第二部で述べた C1B 型の文と同じになるので、(i) の例も (36)b と異なり、C1B に属する文であると考えることができ、安井他 (1976) の説明に反するものとはならない。

- (ii) We are likely to be in New York next week.
- (iii) It is likely that we will be in New York next week.
- (iv) \*It is liable that we will be in New York next week.

ただし、liable の口語用法も、(iv) のような完全な文主語を許すところまでは変化していないようである。

13) certain は一見、不定詞補文を従えている次のような例があるが、これも注の 12) であげた likely と同様、C1B に属する文である。

- (i) Dick is certain to be loyal.

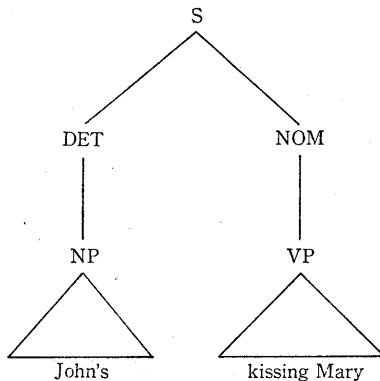
14) willing や loath などは、普通は、前置詞を伴う文は存在しないのに、Pseudo-Cleft 文を作ると前置詞が生ずるという奇妙な例で、このような不定詞補文をとる文は、C4A ではなく、C3 の例であるということになる。

- (i) \*I am willing for your kindness.
- (ii) What I am willing for is for Mary to pay the price.  
(例文は安井, 秋山, 中村 (1976, p. 215) より)

15) このような分析については、例えば Langacker (1972, chapter 1) 参照。

16) このグループに属する形容詞や、名詞のリストは Lasnik & Fiengo (1974) の appendix B にある。また、安井, 秋山, 中村 (1976, p. 245) には形容詞のリストがある。

17) Lasnik & Fiengo (1974) のように、OD を受ける不定詞補文を VP とする考え方に Postal (1976) は、Quantifier Floating の例を用いて批判を行っている。ただし、その再批判が Lasnik & Fiengo (1976) にあるが、それだけで結着がついたようには思えない。少し形は変わるが、やはり、VP を、S に直接支配されない個所



に導入する提案を Schachter (1976) が行っている。動名詞付対格は、S からの変形により派生されるが、所有格のついた動名詞は、概略前ページのような構造をもつという。

Schachter は、対格のついた動名詞だけを S からの変形による提案だけで、十分な議論を展開していないが、ほぼ同様の提案をしている Horn (1975) は、様々なデータをあげている。それらの一つに、次のような文がある。

(ii) We remembered John('s) kissing Mary.

'S つきなら Cleft Sentence や Topicalization で John's kissing Mary は前置可能だが、対格の場合は不可になるという。従って Horn や Schachter の提案では (ii) のような文は、対格でも所有格でも文意は全く変わらないのに、それぞれ S からの変形によるものと、(i) のような構造から導出されるものとに分類され、全く別の深層構造を付与されることになる。これは、Lasnik & Fiengo (1974) の、(41)に関して述べたことと同様の問題点を持っていることになる。

なお、(ii) が前置変形などで差違を示すという現象は、Perceptual Strategy で説明した方が良いと思われる。つまり、'S を用いると全体の結合力が高くなるので、一つのユニットを成して、移動なども対格の場合より自由になると考えられるのである。もし、このような考察が妥当ならば、VP 導入説に対する反証の一つになるかも知れない。動名詞に関するより詳細な議論は、いずれ発表の予定である。

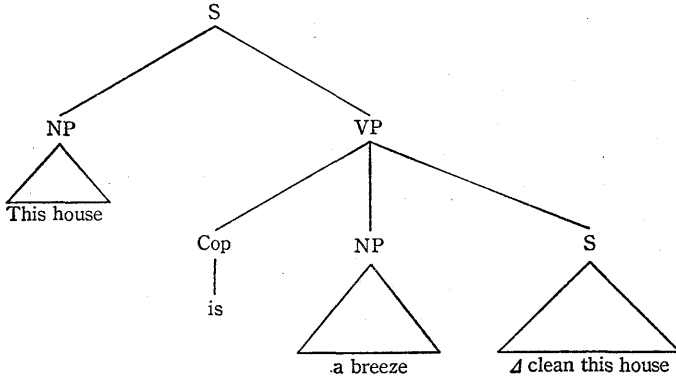
18) ただし、tough 類については問題点も多く、Jackendoff (1975) は、Lasnik & Fiengo (1974) の Tough Movement 反対論が必ずしも全面的に有効なものではないと述べており、OD 説とどちらを選ぶかについては早急な結論は出ないであろうが、OD 説を直接的に支持する最近の議論に、坂本 (1977)、Yamada (1977) などがある。安井、秋山、中村 (1976) は、いずれか決定し難いと述べつつも、Tough Movement 説に基いて解説しており、本稿の (40) ような文は、別のセクションで扱っている。

ただし、Lasnik & Fiengo (1974) の VP 導入説には従わないことを注の 17) で述べたが、それでもやはり本稿の問題点として残るのは、tough 類の後に生ずる for NP をどのように説明するかという点である。形容詞にもよるが、easy などの場合、for NP は不定詞補文の主部ではなく、形容詞の補助部であるという彼らの議論が妥当なものであるなら、注1) であげた PS rules の一部を修正して、VP → Cop ADJ  $\left\{ \begin{matrix} S \\ PP \end{matrix} \right\}$  の代わりに VP → Cop ADJ (PP) (S) を採用すれば、解決できるかも知れない。

Lasnik & Fiengo によると (40) のような pretty 類の形容詞には for NP は生じないので、このような問題は起きないが、ただし、安井、秋山、中村 (1976) の p. 243、脚注 1) には、for NP をとる heavy のような例もあげている。

19) もっとも、本稿のように全て ADJ の下に導入する方式に、もし問題点が生ずるとすれば、今、論じているような比喩用法の名詞(句)は、そのまま NP から導く

よう修正することもできる。その場合、深層文型は、C2の次に、もう一つ新しい型が必要になり、(46)aは概略次のような深層構造をもつことになる。



しかしながら、梶田 (1976, pp. 270-272) が論じているように (彼は、そこでは、Tough Movement の存在を前提として論じているが、ODでも同様に)、tough類とbitchのような名詞が、同じ変形規則を適用されるのは、これらの語彙項目には、それらを他から区別する或る共通の意味要素 X が含まれているからだとも考えられる。この X が何かは、現在のところ不明であるが、bitchのような語句は、そう多くはないように思えるし、どのみち、決定的な方式がどれかは、まだ不明なのであるから、本稿のように、ADJとして一括しておくのも一つの方法ではある。

20) (54) は柴田編「アンカー英和辞典」からのもので、同様の例は大抵の英和辞典や伝統文法書などに見出せるが、しかし私の尋ねたアメリカ人教師は、(53)aは使用するが、(54)のような用法は知らないと答えた。「～を終えて」という意味のthroughの前置詞用法は、まだ、それ程一般化されたものではないのかも知れない。

21) 小西 (1976, p. 12) は、このようなworthを、likeと同様、他品詞に由来する前置詞 (Secondary Preposition) の中に入れているが、その他の多くの辞典類は、そうではない。しかし小西も、特に各論で詳しく取りあげることはしていない。

#### 参 考 文 献 (第三部で使用したもののみ)

荒木一雄, 小野経男, 中野弘三 (1977), 「助動詞」(現代の英文法 第9巻) 研究社。

Chomsky, N. (1965), *Aspects of the Theory of Syntax*. M. I. T. Press.

——, (1970), "Remarks on nominalization," in Jacobs and Rosenbaum (eds.)

- Readings in English Transformational Grammar*. Blaisdell.
- , (1975), *Reflections on Language*. Pantheon.
- Fiengo, R. (1977), "On trace theory," in *Linguistic Inquiry*, Vol. 8, 1, pp. 35–61.
- Horn, G. M. (1975), "On the nonsentential nature of the POSS-ING construction," in *Linguistic Analysis*, Vol. 1, 4, pp. 333–387.
- Hornby, A. S. (1954, 1975), *Guide to Patterns and Usage in English*. Oxford U.P.
- Inada, T. (1975), "A reconsideration of English complement structures," in *Studies in English Linguistics*, No. 3, pp. 118. Asahi Press.
- Jackendoff, R. S. (1972), *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. M. I. T. Press.
- , (1975), "Tough and the trace theory of movement rules," in *Linguistic Inquiry*, Vol. 6, 3, pp. 437–464.
- Kageyama, T. (1976), "On the applicability of complement extraposition," in 英語学 第14号, pp. 29–49. 開拓社。
- 梶田 優 (1976), 「変形文法理論の軌跡」大修館。
- 金口儀明 (1968), 「主題と陳述(上)」(英語の語法 表現篇7) 研究社。
- 小西友七 (1974), 「英語前置詞活用辞典」大修館。
- , (1976), 「英語の前置詞」大修館。
- Langacker, R. W. (1972), *Fundamentals of Linguistic Analysis*. Harcourt Brace Jovanovich.
- Lasnik, H. and R. Fiengo (1974), "Complement object deletion," in *Linguistic Inquiry*, Vol. 5, 4, pp. 535–571.
- , (1976), "Some issues in the theory of transformations," in *Linguistic Inquiry*, Vol. 7, 1, pp. 182–191.
- 中村 捷 (1976), "変形文法の現状と展望 (1), (2)" in 「英語青年」8, 9月号。研究社。
- , (1977), "深層構造の統語的特性" in 「英語青年」4月号。研究社。
- Ogawa, K. (1971), "On the adjective *Afraid*," in 英語学 第5号, pp. 94–103. 開拓社。
- 大沼雅彦 (1968), 「性質・状態の言い方/比較表現」(英語の語法 表現篇3) 研究社。
- 大塚高信編 (1970), 「新英文法辞典」(改訂増補版) 三省堂。
- Postal, P. (1971), *Cross-Over Phenomena*. Holt Rinehart Winston.
- , (1976), "Avoiding reference to subject," in *Linguistic Inquiry*, Vol. 7, 1, pp. 151–182.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1972), *A Grammar of Con-*

*temporary English*. Longmans.

Ross, J. R. (1967), *Constraints on Variables in Syntax*. reproduced by the Indiana Univ. Linguistics Club.

坂本智子(1977), “Easy 構文の意味的考察” in 英語学 第16号, pp. 65-74。開拓社。

Schachter, P. (1976), “A nontransformational account of gerundive nominals in English,” in *Linguistic Inquiry*, Vol. 7, 1, pp. 205-241.

鈴木英一(1977), “深層構造をめぐって—標準理論から痕跡理論まで” in 英語学 第16号, pp. 37-64。開拓社。

八木孝夫(1977), “X-bar 理論について(1),(2)” in 「英語青年」6, 7月号。研究社。

Yamada, H. (1977), “Problems with Tough-Movement,” in *Descriptive and Applied Linguistics*, Vol. 10, pp. 275-295. I. C. U.

安井稔, 秋山怜, 中村捷(1976), 「形容詞」(現代の英文法 第7巻), 研究社。

(付記: 一般の辞書類からも, 例文を引用しているが, 特に crucial な場合にはその都度, 出典を明記したので, この参考書表には入れていない。)